

デカルトにおける「質料的虚偽」概念の検討

武 藤 整 司

(人文学部文学科哲学研究室)

Une Considération sur la Notion de *falsitas materialis* chez Descartes

Seiji Murô

目次

- I. 問題の所在
- II. アルノーの論駁とデカルトの答弁
- III. 形相的と質料的
- IV. 「質料的虚偽」概念の役割

I. 問題の所在

デカルトは、『省察』の中で「質料的虚偽 (*falsitas materialis*)」という概念を用いている (VII-43)*。この概念は、観念のうちに見出される虚偽を意味しており、判断のうちに見出される虚偽を意味する「形相的虚偽 (*falsitas formalis*) (ibid.)」と、言葉の上からはいかにも対を成しているかに思われるが、事態はそれほど単純ではない。というのも、ここで用いられている「形相的」、「質料的」、「虚偽」といった言葉は、その意味を十分に検討しないうちは、読者に不可解な印象しか与えないからである。『省察』の第四論駁者であるアルノーは、この質料的虚偽という概念の導入によって生じる矛盾を指摘し、この矛盾がデカルトの諸原理に齟齬を来していると論難する (VII-206)。アルノーが突いた矛盾を一点に集約すればこうなる。すなわち、一方でデカルトは、「本来の意味での虚偽、すなわち形相的虚偽は、ただ判断のうちのみ見出され得る (*falsitatem proprie dictam, sive formalem, non nisi in iudiciis posset reperiri*) (VII-43)」と主張しながら、他方で敢えて別種の虚偽を持ち出し、議論を混乱させている点である。虚偽がただ判断のうちのみ見出され得るのであれば、言い換えれば、ただ判断のうちしか見出され得ないのであれば、質料的虚偽は、いわば「なくもがなの概念」であり、その意味で、アルノーの批判は妥当なものであると言えよう。たしかに、この概念は読者の誤解を招き易いものであり、解釈の上で相応の整理を要するものであるが、決して不必要な概念ではなく、むしろデカルトの議論において、重要な役割を果たしているのである。

* デカルトからの引用は、*ŒUVRES DE DESCARTES*, publiées par C. Adam & P. Tannery, nouvelle présentation, 11 vols. による。尚、原則として、本文中にその巻数をローマ数字によって、その頁数をアラビア数字によって記す。また、必要に応じてその表記を改めた箇所や、引用原文をイタリックにした箇所がある。さらに、イタリック体の訳にはすべて傍点を施した。

さて、『省察』の中で最初に確実なものとしてされるのは、「考えるもの (res cogitans) (VII-34)」としての「我」であるが、もし、さらに進んでその「我」の意識のうちにある観念の綿密な吟味がなされなければ、デカルトの『省察』は「我」の確実性から一步も踏み出せないことになる。換言すれば、独我論の分厚い壁を破れないことになる。したがって、観念の吟味は、デカルトにとって焦眉の急であったことが分かるだろう。質料的虚偽は、この観念の吟味における鍵概念なのである。

小論の意図は、『省察』における当該概念の役割を検討し、その意義を解明することにある。その際、デカルトの用語上の不手際に根差すアルノーの誤解を解消することから始め、質料的虚偽が、判断に先立ってなされる観念の吟味において、不可欠の概念として働いていることを明らかにしたい。

尚、デカルトの用語法に関しては、以下でおいおい明らかになってくる筈であるが、次の点についてだけは予め確認しておきたい。すなわち、デカルトが言う本来の意味での虚偽とは、「我」のうちにある観念が「我」の外にある何ものかに「類似している」、あるいは「合致している」、と判断するところに成り立つ (VII-37) 虚偽のことである、という点である。

II. アルノーの論駁とデカルトの答弁

周知の通り、『省察』が出版された当時から今日に至るまで、さまざまな議論を呼び、かつ批判的となった問題の一つは、「明晰判明知」と「神の存在証明」を巡る循環の問題である。我々が小論で検討する外来観念の質料的虚偽に関するデカルトの見解も、この「循環の問題」ほど頻繁には論者達の興味を惹かなかったとは言え、それに負けず劣らず容認されることの稀な見解であった。アルノーの論駁は、後代の解釈者の否定的批評*を先取りする論調で彩られているが、我々は先ず、彼の論駁の主旨と、併せてそれに答えたデカルトの答弁を検討し、両者の間に横たわる溝を埋めることから始めてみよう。

アルノーは、デカルトの質料的虚偽についての見解が、「彼 (=デカルト) の諸原理に適合していない (ab ejus principiis dissonum) (VII-206)」と端的に述べた後で、当該の問題が孕む難解さを指摘し、例を挙げて事柄を明瞭にしよう、と提言している。少し煩雑になるが、以下、順を追ってアルノーの論駁を引用してみよう。

「彼 (=デカルト) は言います。もし、冷たさが単に熱さの欠如であるとすれば、冷たさをいわずに肯定的なものとして私 (=デカルト) に表象する冷たさの観念は、質料的に偽であることに

* デカルトの立場を擁護する側の解釈者である N・ウエルズによれば、以下のような否定的な解釈が挙げられる。例えば、M・ウイilsonは、デカルトの答弁を「混乱の典型」と看做しているし、R・マックレーは、質料的虚偽を巡る問題を「困難で筋の通らない問題」と批評している。また、A・ケニーは、偽なる観念についてのデカルトの説明には混乱があると指摘している。さらに、J・コッティンガムは、デカルトとアルノーの応酬を「錯綜し、結論の出ない遺取」と看做し、デカルトが挙げた例は「不必要に複雑」とであると主張している。

Cf. N. Wells, 'Material Falsity in Descartes, Arnauld, and Susrez', in *Journal of the History of Philosophy* 22, 1984

M. Wilson, *Descartes*, Routledge and Kegan Paul, 1978, p.110

R. McRae, *Studia Cartesiana I*, 1979, p.218

A. Kenny, *Descartes: A Study of His Philosophy*, Random House, 1968, p.119

J. Cottingham, *Descartes' Conversation with Burman*, Clarendon Press, 1976, p.67

なるでしょう。[ところがそうではなくて、]かえって、もし、冷たさが欠如にすぎないとしたら、冷たさをいわば肯定的なものとして私に表象する冷たさの観念は、何も与えられないのであり、ここで著者(=デカルト)は、判断を観念と混同しているのです。(Si, inquit, frigus sit tantum privatio caloris, idea frigoris, quæ illud mihi tanquam rem positivam repræsentat, materialiter falsa erit. Imo, si frigus sit tantum privatio, nulla poterit dari frigoris idea, quæ illud mihi tanquam rem positivam repræsentet, & judicium hic ab authore cum idea confunditur.) (ibid.)」

最初の終止符までの一文は、アルノーがデカルトを引用した文(正確に引用したのではなく、以下で見るように、かなり誤解の元となる引用文となっている)であるが、正確にはこうなっている。

「そして、いわばものの観念ではない観念などあり得ないのであるから、もし、冷たさが熱さの欠如に他ならないことが真であるとすれば、私に冷たさをあたかも何か実在的で肯定的なものとして表象する観念は、偽である、と言われても不当ではないだろうし、その他のものについても同様である。(Et quia nullæ ideæ nisi tanquam rerum esse possunt, siquidem verum sit frigus nihil aliud esse quam privationem caloris, idea quæ mihi illud tanquam reale quid & positivum repræsentat, non immerito falsa dicitur, & sic de cæteris.) (VII-44)」

比較を容易にするために、多少の細工を施して両文を並べてみよう。なお、この細工は瑣末な箇所を省略したにすぎないので、意味に変わりはない。

○ アルノーの引用文

Si frigus sit tantum privatio caloris, idea frigoris, quæ illud mihi tanquam rem positivam repræsentat, materialiter falsa erit.

○ デカルトの原文

Siquidem verum sit frigus nihil aliud esse quam privationem caloris, idea quæ mihi illud tanquam reale quid & positivum repræsentat, non immerito falsa dicitur.

アルノーの引用文(以下、Aと略記)とデカルトの原文(以下、Dと略記)との間にある顕著な相違は以下の三点である。

- ① Dの仮定節が「『冷たさ=熱さの欠如』が真である」という二重構造を採っているのに対して、Aの仮定節は「冷たさ=熱さの欠如」だけである。
- ② Dの帰結節の主語である「観念」には「冷たさの」という限定が付いていないのに対して、Aの帰結節の主語には付いている。
- ③ Dの帰結節は「偽である、と言われても不当ではない」というように、断定的な表現を避けているのに対して、Aの帰結節は「質料的に偽であろう」というように、断定的な表現になっている。

さて、上記の相違から生じたと看做すことのできるアルノーの誤解を一つずつ挙げてゆこう。

①に関して：Dでは、「冷たさ＝熱さの欠如」を、観念の側で扱っており*、その観念によって表象される当の対象の側の「冷たさ」や「熱さ」が問題になっている訳ではないのに対して、Aでは、直接対象の側の「冷たさ」や「熱さ」を問題にしている。すなわち、Dにおいては、「冷たさ＝熱さの欠如」が真であるとすれば」というように、二重構造を採っているのに対して、Aにおいては、この二重構造を故意にか不注意にか、ともかくも単純化して単一構造に改竄しているのである。言い換えれば、デカルトにとって、対象の側の「冷たさ」が「熱さ」の欠如であるかどうかは問題なのではなくて、それを表象する観念が真かどうかは問題なのである。これに対して、アルノーは対象の側の「冷たさ＝熱さの欠如」を仮定したために、「もし、冷たさが欠如にすぎないとしたら、冷たさをいわば肯定的なものとして私に表象する冷たさの観念は、何も与えられない」と読み誤っているのである。

たしかに、アルノーが言うように、対象の側の「冷たさ」が「熱さ」の欠如であるとすれば、その観念、すなわち「『冷たさ』の観念**」は、最初から与えられないであろう。しかし、デカルトが問題にしたのは、既に与えられている「冷たさの観念**」なのであるから、アルノーの批判は誤解に基づく的外れなものとして看做することができる。ただし、アルノーは、デカルトが設けた二重構造を見落としたために、大きな誤解に陥ったのである。

②に関して：Dでは、注意深く「冷たさの」という限定を外しているのに対して、Aでは安易にこの限定を付しているために、ここでもアルノーはデカルトの真意を汲み損なっている。というのも、デカルトは「私に冷たさをあたかも何か実在的で肯定的なものとして表象する観念 (*idea quæ mihi illud tanquam reale quid & positivum repræsentat*) (VII-44)」と表現することによって、「これはあくまで『観念』ではあるけれども、それが本当は何を表象している観念かは分からない」という含みを込めているのに対して、アルノーはこの含みを無視して、いきなり「『冷たさ』の観念」としたために、「いま、観念について言えば、観念はただそれ自身において観られ、私がそれを他

* 「質料的虚偽」が問題となる箇所、デカルトは、「熱さと冷たさについて私が持っている観念は、明晰判明であることがほとんどないので、冷たさが単に熱さの欠如であるのか、それとも、熱さが冷たさの欠如であるのか、あるいは、両者とも実在的性質であるのか、それとも、両者ともそうではないのかを、私はこの観念から判別できないのである。(ideæ quas habeo caloris & frigoris, tam parum claræ & distinctæ sunt, ut ab iis discere non possim, an frigus sit tantum privatio caloris, vel calor privatio frigoris, vel utrumque sit realis qualitas, vel neutrum.) (VII-43~44)」と述べ、アルノーの誤解の生じる下地となっている。というのは、この箇所で言及されている「冷たさ」や「熱さ」が、果たして対象の側のものか、観念の側のものか、一概には判断できないからである。しかし、この箇所での「冷たさ」や「熱さ」が、たとえ対象の側のものであっても、デカルトは現にある冷たさの観念を問題にしているのだから、観念の側で扱っていると看做することができるだろう。

** ここで、多少煩雑になることを覚悟の上で、「『冷たさ』の観念」と、「冷たさの観念」を区別しておきたい。というのも、アルノーの言う《冷たさの観念》と、デカルトの用いる《冷たさの観念》とは、決定的な相違があるからである。すなわち、本論でも指摘したように、デカルトは、「私に冷たさをあたかも何か実在的で肯定的なものとして表象する観念」は、その観念が表象している筈の当の対象である「冷たさ」を実際に表象しているかどうかは分からないと述べ、いわば、仮に「冷たさの観念」と呼んでいるのに対して、アルノーは、「冷たさ」を対象の側に予め措定した上で、その観念を「『冷たさ』の観念」と呼んでいるのである。すなわち、デカルトにとっての「冷たさ」は何か判然としないものであるのに対して、アルノーは、「冷たさ」をいわば既知のものとして看做している。②で見るように、デカルトが注意深く「冷たさの」という限定の言葉を付さなかった所以もこれで明らかになったであろう。従って、デカルトの《冷たさの観念》を「冷たさの観念」と表記し、アルノーのそれを「『冷たさ』の観念」と表記して、これらを区別することにしよう。

のものと同様関係させなければ、本来、偽ではあり得ないのである。(Jam quod ad ideas attinet, si solæ in se spectentur, nec ad aliud quid illas referam, falsæ proprie esse non possunt.) (Ⅶ-37)」というデカルトの説明を誤解し、それどころか「観念は本来偽ではあり得ない」という箇所を逆手に取って、それでは何故「質料的虚偽」などという無用な概念を持ち出すのか、と振じ込んでいるからである。デカルトは、「冷たさをあたかも何か実在的で肯定的なものとして表象する観念」が「観念であること」は認めても(質料的な側面*)、それが「実際には何を表象しているか」が疑わしいから(形相的な側面*)、ここでは敢えて「冷たさの」という限定の言葉を外しているのである。アルノーはこのデカルトの配慮を看過したために、二種類の虚偽を持ち出すデカルトの見解を誤解したのである、と解釈できるだろう。

③に関して：Dでは、「偽である、と言われても不当ではない」という表現を採っている。これが意味するところは、下記のデカルトの答弁において、ある程度は窺い知ることができるだろう。

「すなわち、冷たさが肯定的なものであれ、欠如であれ、それだからと言って、そのもの(=冷たさ)について他の観念を私が持っている訳ではなく、相変わらず私のうちには私がいつも持っていたのと同じ観念が存在しているのです。もし、冷たさが欠如であって熱さと同じ程度の実在性を持っていないということが真であるならば、このような冷たさの観念そのものが私に過誤の素材を、提供するのである、と私は言っているのです。というのも、熱さと冷たさの観念の双方を、その両方とも感覚によって受け取られるという点に従って考察してみると、一方よりも他方がより多くの実在性を私に表示するとは認めることができないからです。(nempe sive frigus sit res positiva, sive privatio, non aliam idcirco de ipso habeo ideam, sed manet in me eadem illa quam semper habui; quamque ipsam dico mihi præbere materiam erroris, si verum sit frigus esse privationem & non habere tantum realitatis quam calor; quia, utramque ideam caloris & frigoris considerando prout ambas a sensibus accepi, non possum advertere plus mihi realitatis per unam quam per alteram exhiberi.) (Ⅶ-232~3)」

ここでも、①の二重構造が活かされていると考えられる。すなわち、それが本当は何を表象しているのか定かではないが、ともかく「私」は「冷たさの観念」を持っており、この観念を「熱さの観念」と比べた場合、どちらもより多くの実在性を「私」に表示しないのであるから、「過誤の素材」を提供するという点で、そのような観念のうちに質料的な虚偽が見出される、とデカルトは説明し

* 筆者は、ここで、「質料的な側面」と「形相的な側面」という言葉を用いるが、混乱を避けるために少し説明しておきたい。

デカルトによれば、観念には「質料的」な側面と「形相的」な側面との二つの側面がある。すなわち、観念を「質料的に(materialiter)」に解した場合、それは「知性の作用(operatio intellectus)(Ⅶ-8)」であり、どのような観念であれ、観念相互には何らの「不等性(inæqualitas)(Ⅶ-40)」も認められない。つまり、山羊だろうがキマイラだろうが、それを表象する知性の作用としての観念は偽ではあり得ないのである(Ⅶ-37)。反対に、観念を「形相的に(formaliter)」に解した場合、それは「ものを表象する」という観念の形相的な側面を洗い直すことである。したがって、その表象している対象の真偽が問題となり、「観念の表象的実在性」に照らして、その対象の真偽が吟味されることになる。ここで、注意したいことは、質料的虚偽が問題になるのは、観念の「質料的な側面」ではなく、「形相的な側面」であるということである。「質料的な側面」は上で説明したように、真偽を問われないのである。このように、「質料的」と「形相的」という言葉が錯綜しているので、アルノーが誤解したのも、デカルトの非に負うところ大である、と言っても過言ではあるまい。なお、この点については、次章で敷衍することにする。(参照：拙論「デカルトの認識論における洗練の過程」、『哲学論叢』XⅦ, 1990)

ているのである。したがって、「観念そのものが虚偽である」と言っているのではない(知性の作用としての観念は真偽を問われない)。ここで問題になっているのは、判断以前の観念の吟味であって、判断されるべき「対象とそれを表象する観念の類似あるいは合致」ではない。つまり、Dは観念の側だけの議論で貫かれており、観念が表象する対象は議論の枠組から除外されているのである。けだし、「冷たさの観念」はあくまで「観念」であり(質料的な側面)、それが質料的には偽であり得る(形相的な側面)、というのがデカルトの主張なのである。アルノーは、この点を混乱した仕方解釈し、「観念そのものが虚偽である」と受け取っているのである。というのも、AからはDの「偽である、と言われても不当ではない」という含みが抜け落ちており、Aのような断定的表現では、「観念には形相的な側面と質料的な側面がある」ということを把握していないと看做されても仕方がないからである。もし、アルノーがこの点をはっきりと理解していたならば、「質料的虚偽」を巡るデカルトの見解に矛盾を見出すこともなかったであろう。

以上のような誤解に基づいて、アルノーはさらに続ける。

「実際のところ、冷たさの観念とは何でしょうか。知性において表象的に存在する限りの冷たさそのものです。しかし、もし、冷たさが欠如であるとすれば、冷たさは、その表象的存在が肯定的存在者である観念を通して[観念によって]知性において表象的に存在することはできません。それ故、もし、冷たさが単に欠如であるとすれば、冷たさの肯定的な観念は決してあり得ないでしょう。したがって、質料的に偽であるところの観念などあり得ないのです。(Quid enim est idea frigoris? Frigus ipsum, quatenus est objective in intellectu. At si frigus sit privatio, non potest esse objective in intellectu per ideam, cujus esse objectivum sit ens positivum. Ergo, si frigus sit tantum privatio, nunquam illius poterit esse idea positiva, & proinde nulla quæ materialiter falsa sit.) (Ⅷ-206)」

この文を見れば、二つの点でデカルトの見解を誤解していることは明白であろう。すなわち、アルノーは、「『冷たさ』の観念」を「知性において表象的に存在する限りの冷たさそのもの」と解しているが、これこそデカルトが質料的虚偽という概念を用いて斥けたかった一事である。何故なら、「冷たさ」という対象が判然とはせず、それ故「過誤の素材」をその観念が与える、と述べているからである。言い換えれば、「冷たさ」は知性において表象的に存在するかどうか疑わしいのである。また、アルノーは、対象の側の「冷たさ=熱さの欠如」と解したために、①で触れた誤解に陥って、そのような観念は与えられないから、質料的に偽なる観念などあり得ない、という結論を引き出してしまったのである。しかし、アルノーも、デカルトの言う、「冷たさをあたかも何か実在的で肯定的なものとして表象する観念」が実は「冷たさの観念」ではないのかも知れないという箇所を認めた恰好で、議論している部分もある。以下はその箇所である。

「しかし、とあなたは言うでしょう、その観念が冷たさの観念ではないという点において、その観念は偽であると。もし、あなた(=デカルト)が、それは冷たさの観念であると判断なさるのであれば、却って、あなたの判断こそ偽です。実際、その観念自体はあなたのうちにおいて、極めて真なのです。(Sed, inquires, eo ipso falsa est, quod non est frigoris idea. Imo judicium tuum falsum, si illam judicas esse frigoris ideam: ipsa vero in te verissima.) (Ⅷ-207)」

ここで注意すべき第一の点は、アルノーの「もし、あなたが、それは冷たさの観念であると判断

なさるのであれば」という仮定である。上で見てきたように、デカルトはそう判断するどころか、むしろ判断に先立って観念そのものを疑っているのである。この点で、アルノーの論旨は無謀であると看做することができる。第二の点は、「その観念自体はあなたのうちにおいて、極めて真なのです」という部分である。アルノーが真であると看做しているのは、「観念」の質料的な側面（作用としての観念）であって、形相的な側面（表象としての観念）ではない。デカルトはまさにこの形相的な側面を疑ったからこそ、質料的虚偽という概念を用いたのである。

さて、ここで指摘しておきたいことは、「形相」および「質料」と、それに関連する言葉のデカルトの用語法の煩雑さについてである。我々は、アルノーの誤解を生む契機になったのがまさにこの用語法の煩雑さにあったのではないか、という疑問を呈して、この章を閉じたい。

Ⅲ. 形相的と質料的

さて、「虚偽 (falsitas)」という言葉に修飾する形容詞、「形相的 (formalis)」および「質料的 (materialis)」を吟味しなければならない。一見して、これらの対語は、アリストテレスの「エイドス」と「ヒュレー」を連想させる。勿論、これらの対語は、その伝統的な意味に基づいて用いられている語ではあるが、我々はその常識を一旦棚上げにし、デカルトの言葉に耳を傾けてみよう。

手始めとして、「形相的」、あるいは、その副詞形である「形相的に (formaliter)」を、「形相 (forma)」という名詞形とともに、デカルトにおけるその用語法を手短かに検討してみよう。それによって、自ずと「質料的に」の意味も鮮明になってゆくであろう。

デカルトは、観念を「思惟の形相 (cogitationis forma) (Ⅶ-160)」あるいは「思惟することの様態 (cogitandi modus) (Ⅶ-40)」と規定し、「意志 (voluntas)」や「感情 (affectus)」や「判断 (judicium)」と共に、思惟に内在的なものと考えている (Ⅶ-37)。さらに、観念は「ものの像 (rerum imagines)」でもあり、これにのみ、観念という名称が本来的に与えられる (ibid.)。すなわち、ものを映し出しているというこの特徴が、その他の思惟の形相である意志などと大きく異なる点である*。

さて、このように観念は「思惟の形相」と言われるが、それでは、この形相という言葉はどのような場面で使用されるのであろうか。第一に、それは観念だけに用いられている訳ではない。上で述べたように、意志や判断などの知性の作用も「思惟の形相」だからである。第二に、それは「実体 (substantia)」を認知する際の媒介として使用される言葉である。というのも、実体は、それ自体直截に知られるものではなく、ある「形相」ないし「属性 (attributum)」を介して知られるからである (Ⅶ-222)。すなわち、「延長し、可分的であり、形を有するということ (esse extensum, divisible, figuratum)」は、それによって「物体 (corpus)」と呼ばれる実体を認知する「形相」もしくは「属性」なのである (Ⅶ-223)。

勿論、このことは物体的事物だけに限られることではない。「知性認識し、意志し、疑うこと (esse intelligentem, volentem, dubitantem)」もまた、「精神 (mens)」と呼ばれる実体を認知する際の形相あるいは属性だからである (ibid.)。このことから分かることは、「形相」という言葉が、物体と精神とを別の実体として区別する際に用いられる属性と同義なものとして使用されているということである。しかし、形相が属性と同義であるとしても、観念が直ちに精神の属性ということにはな

* 観念を「ものの像 (非物体的な像)」とする解釈に疑問を呈する解釈者もいるが、ここでは検討しない。

Cf. J. Costa, 'What Cartesian Ideas Are Not', in *Journal of the History of Philosophy* 21, 1983

らない。何故なら、属性の定義からして*、「知性の作用」としての観念は精神の属性と看做すことはできるであろうが、観念は一方でさまざまに変化する「ものの像」でもあるから、デカルトに従えば、属性と言うよりもむしろ様態と言った方がよいからである。

また、その副詞形である「形相的に」に注目すると、興味深い事実が浮かび上がる。それは、この言葉と密接な関係を持つ副詞が三つあるということである。すなわち、我々が通常「形相的に」の対として考えている「質料的に」と、それに加えて「表象的に (objective)」および「卓越的に (eminenter)」との三つである。「質料的に」は措くとして、残りの二つについて少しばかり説明しておこう。

先に述べたように、観念を形相的に解するということは、言い換えれば、「ものを表象する」という観念の形相的な側面を問うことである。ここで、はじめて、観念が表象する内容が問題になる。すなわち、観念の吟味の領域に踏み込む訳である。したがって、この場合、「表象的に」は「形相的に」と同義である。つまり、観念を表象的に解する場合、「知性の作用」としての観念が問題となる訳ではなくて、その観念が表象しているものが問題になるのである。また、「卓越的に」は、表象的実在性を有する観念と、その原因である「観念の対象」との結び付きの仕方が問われる場面で用いられる言葉である。すなわち、原因である「観念の対象」と、その結果である「観念」のうち、同じものが同じように存在する場合、「原因のうちには、結果のうちにあるものが形相的にある」と言われるのである。これに対して、同じようにはないけれども、結果における役割を代行できるほど大きなものが原因のうちにある場合、「原因のうちには、結果のうちにあるものが卓越的にある」と言われるのである (Ⅶ-161)。

さらに、「形相的」という形容詞は「実在性 (realitas)」という語にも被せられる。これは「表象的実在性 (realitas objectiva)」と対を成しており、実在するものが、それを認識する精神とは関係なく持っている実在性を「形相的実在性」と呼ぶのに対して、その当のものが一度精神との関係においてその実在性が問われる場合の実在性が「表象的実在性」なのである (Ⅶ-41)。

以上は、「形相」およびそれに関連する言葉の意味であるが、これを纏めると以下ようになる。

- ① 「形相」とはあるものをあるものたらしめているその要素のことである。
- ② 「形相」は属性とほぼ同義である。したがって、殆どの場合、多様なあり方はしない。
- ③ 「形相的に」は、「質料的に」、「表象的に」、「卓越的に」の三つの言葉と関連している。
- ④ 「形相的」は「実在性」と結び付いて、「表象的実在性」と対を成している。

それでは一体、「形相的虚偽」と言われる場合の「形相的」とはどのような意味なのであろうか。結論から言えば、①に該当するのではないか。すなわち、「本来的な虚偽 (意識のうちにある観念が意識の外にある何かと似ている、あるいは合致していると判断するところに成り立つ虚偽)」をその「本来的」という意味あいから、「形相的」という語を採用したのであろう。というのも、これこそが虚偽を虚偽たらしめる本来的な虚偽だからである。これに対して、質料的虚偽は、「形相的

* デカルトは、『省察』において「属性」を明瞭に定義している訳ではないので、『哲学の原理』を参考にし、これを補うことを許されたい。

「実在し、持続する事物における実在や持続のように、それらの事物の中で決して多様なあり方をしないものは、性質、もしくは、様態と言われるべきではなく、属性と言われるべきなのである。(ea quae nunquam in iis diverso modo se habent, ut existentia & duratio, in re existente & durante, non qualitates aut modi, sed attributa dici debent. (Ⅷ-1-26))」

と対にする目的もあったであろうが、「過誤の素材 (*materia erroris*) (VII-231)」という言葉を用いていることから窺えるように、虚偽を生み出す「素材」から採ったのであろう*。

いずれにしても、形相的虚偽は判断に関わる虚偽であり、質料的虚偽は判断の材料となる観念に関わる虚偽である、というデカルトの論旨は理解可能だろう。虚偽を「真理を探求する上での障碍」と考えた場合、デカルトはその障碍を二通りに区別したのである。これは、「雪は冷たい」という命題を想定してみれば、一層理解し易い。形相的虚偽がこの命題全体に関わるものであるのに対して、質料的虚偽は命題を構成する名辞（たとえば、「雪」）に関わるのである。

ここで、先の疑問「アルノーの誤解はデカルトの用語法の煩雑さに起因しているのではないか」を検討してみよう。上で見たように、「形相」に関連する言葉は、割合安易に用いられており、その意味を確定することは容易ではない。それ故、この問題にはこれ以上立ち入らないことにして、直ちに問題の核心に迫ることにしよう。

先に触れたように、デカルトが質料的虚偽を問題にするのは、観念が「形相的な側面」から観られた場合であって、「質料的な側面」から観られた場合ではない。すなわち、観念はそれが「知性の作用」（質料的な側面）である限り、既に存在が確立された「我」の様態（＝思惟の様態）であるから、真偽は問われないのである。アルノーが混乱を余儀なくされたのは、この観念の一側面である「質料的」と、虚偽に被せられた「質料的」を同一視したためと考えられる。しかし、それもデカルトの用語法の煩雑さに起因するのであって、一概にアルノーにのみ責を負わすことはできないだろう。すなわち、デカルトは、相似た言葉を別の文脈で使用しており、しかもその区別を読者にははっきりと分かるように立てなかったために、デカルト自身には明瞭な区別がアルノーにはなかなか通じなかったのである。少なくとも、「虚偽」に「形相的」あるいは「質料的」という言葉を被せなければ、このような煩雑さはいくらかは解消できたであろう。

観念の「形相的」な側面を問う箇所では「質料的虚偽」という言葉を用い、しかも、観念は「質料的に」観られた場合は、その真偽を問われない（形相的虚偽とは無縁である）というデカルトの議論は、予め言葉の明瞭な区別を立てない限り、容易に理解できるものではない。上で見た一連の煩雑さを前にしたとき、この議論が読者の眼に錯綜して見えるのも、何ら不思議ではないのである。

IV. 「質料的虚偽」概念の役割

さて、前章で、「アルノーの誤解はデカルトの用語法の煩雑さに起因する」ということがある程度明らかになったと思われる。しかし、たとえこの誤解が解消されたとしても、依然として「質料的虚偽」概念がデカルトの議論に不可欠のものであるかどうかは確定できない。したがって、本章では「質料的虚偽」概念の『省察』における役割を検討してゆくことにしよう。

デカルトの『省察』は、日常的信念に対する懐疑から始まり、さらに悪霊まで動員して数学的真理さえも無へと葬り去る挙に出た末に、一転して、その懐疑の遂行者である「我」の存在を第一原理として定立し、神の存在証明を経て、いわば間接的に、物体認識へと至る不可逆の道程として記述されている。すなわち、順序に従えば、「懐疑」→「我在り」→「我は考えるものである」→「作用としての観念」→「表象としての観念」→「神の存在証明」→「物体の存在証明」となっている。勿論、これは大まかな流れであるが、この連鎖で一番飛躍していると看做すことができるのが、

* 勿論、デカルトも語っているように (VII-235)、「質料的虚偽」という言葉がストアレスに遡れることは考慮しなければならないが、小論では論じない。

Cf. N. Wells, op. cit.

「作用としての観念」→「表象としての観念」である。すなわち、観念に「両義性 (æquivocatio) (Ⅶ-8)」を持たせて、「我」から「我」以外のものを引き出そうと目論んだ箇所である。なるほど、観念を他のものに関係付けなければ、本来虚偽など存在しない (Ⅶ-37)。しかし、ものに関係付けなければ、判断のしようがない。すなわち、独我論に陥る。そこで、観念と観念の対象との間に因果関係を設け、表象的実在性に照らして明晰判明なものだけに存在を与え直すという道を選択したのである。というのは、「観念」と「その原因と看做される対象」との類似、あるいは合致は、単に日常的な信念に過ぎず、いわば、「自発的傾動 (spontaneus impetus) (Ⅶ-38)」あるいは「盲目的衝動 (cæcus impulsus) (Ⅶ-40)」によって判断されたことであって、必然的に懐疑に晒されるからである。したがって、デカルトが観念の吟味において第一に問題にしたことは、いかなる観念が知性の外に存在するものを原因として持ち、その原因が「観念によって表象されたもの」と類似、あるいは合致するのか、ということである。その際、「過誤の素材」を与えるものが、他ならぬ質料的虚偽なのである。しかし、現実問題として、「冷たさの観念」はたしかに「我」のうちに見出される。このような事態に直面したデカルトは、以下のように対処している。

すなわち、質料的虚偽の潜む観念を、「知性の外にはいかなる存在を持つことのないある種の感覚 (sensus quidam nullum habens esse extra intellectu) (Ⅶ-233)」と定義することによって、観念と対象との間の因果関係を断ち切り、物体認識に至る議論の枠組から予め除外するのである。

さらに質料的に偽であると判定する基準は、ただ「不明瞭性 (obscuritas) (Ⅶ-234)」だけであると述べ、この「不明瞭性」のみが、「我」に「過誤の機会 (occasio erroris) (Ⅶ-233)」を与えるのであると結論している。したがって、「冷たさの観念」は、その出所を問われるべき観念ではないのである。

デカルトは、「我」からすべてを引き出そうとした。そこに大きな飛躍が生じた。そして、この飛躍故に質料的虚偽の介入する余地が生まれたのである。形相的な虚偽は明晰判明なものに対して以外は判断を差し控えるという方法で回避することができる (Ⅶ-59) が、観念を出発点とする以上、判断以前の観念の整理が不可欠であった。何故なら、観念は質料的に (知性の作用として) 解すればすべて真である以上、観念相互に区別を設けられないからである。すなわち、「表象的実在性」概念と「質料的虚偽」概念とは、判断以前に観念の整理をする役割を持っていたのである。これら両者は、いわば表裏をなす関係で、前者は、それに存在を与えるものを掬いあげるための概念装置であり、後者は、それに存在を与えないものを斥けるための概念装置だったのである。勿論、その区別の基準となるものは、上で触れたように「明晰判明」以外にはない。何故なら、色や音や香りや味や冷熱などの性質は、極めて「混乱した不明瞭な仕方 (confuse & obscure) (Ⅶ-43)」しか認識されず、その意味で、デカルトは「これら [の諸性質] が真であるのか偽であるのか、言い換えれば、これらについて私が持っている観念が、何か存在するものの観念であるのかそうでないのか、私には分からないのである。(ignorem an sint veræ, vel falsæ, hoc est, an ideæ, quas de illis [=qualitates] habeo, sint rerum quarundam ideæ, an non rerum.) (ibid.)」と述べているからである。

デカルトが自らの形而上学を確立するに当たって、スコラ哲学の格率「先ず、感覚のうちに存しなかったものは、悟性のうちには存しない (il n'y a rien dans l'entendement qui n'ait premièrement été dans le sens) (Ⅶ-37)」を斥け、感覚に対する素朴な信頼を捨てた以上、観念の吟味は不可欠だったのである。つまり、デカルトの形而上学の目的は、この複雑多岐な現実の世界を感じたままに掬いあげることにあったのではなく、むしろあらゆる存在者を、感覚や想像力の不定性に左右されない観念へと還元する作業を通じて、目の前に広がる世界を、幾何学を規範として再構成することであった。その際、明晰判明という厳密な条件を充たすことができず、存在者の階層から滑り

落ちたものは枚挙に遑がないほどである。それらの代表的なものが、味、香り、音、冷たさといった、いわゆる物体の「二次性質 (secondary qualities)」であったことはいうまでもないだろう*。

ここに構成された世界は、無際限な延長の世界であり機械的な運動の世界である。さらに敷衍するならば、無味無臭の静寂な世界である。このことから直ちに、デカルト哲学には生命の息吹が全く感じられない、という結論を引き出してこれを批判することは容易であろう。事実、デカルトは動物を一種の機械と考えていたので**、一概にそのような批判を的外れなものとして斥けることはできないのである。またたしかに、デカルトが感覚や想像力を認識論上の手段として低く看做したために、豊穡な世界が何やら骨格だけの世界に様変わりしたような印象を与えよう。しかし、デカルトといえども、世界の姿は「延長としての物体の世界——思惟としての精神的世界」という二元論だけに還元できると言い切っていない。デカルトが身体に課した特別な役割や、『情念論』を綴らなければならなかった経緯を鑑みれば、それを諾うことは自然であろう。

デカルトは、ある書簡でこう語っている。

「真理は存在のうちに存し、虚偽は非存在のうちにのみ存する。(La vérité consiste en l'être, et la fausseté au non-être seulement.) (V-356)」

つまるところ、「冷たさの観念」は、デカルトにとって限りなく「非存在」に等しいものだったのである。

* この「物体の性質」の問題が、やがてイギリスのロックに引き継がれてゆくと考えられる。デカルト哲学のロックへの影響関係に関しては、詳細な議論を要するので勿論ここでは触れることはできない。また、基本的立場の異なる両者に、何らかの類似点を見出したからと言って、安易に影響云々を論じてはならないだろう。しかし、ロックの二次性質を論じる箇所は、デカルトの議論を彷彿させることも事実である。

Cf. J. Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, edited with a foreword by Peter H. Nidditch, Oxford at the Clarendon Press, 1975, pp.135ff.

** 動物機械論は、『方法叙説』第五部で詳論されている。

Une Considération sur la Notion de *falsitas materialis* chez Descartes

Seiji MUTÔ

Dans *Meditationes*, Descartes emploie la notion de *falsitas materialis* (fausseté matérielle). À première vue, cette notion semble faire pendant à l'autre de *falsitas formalis* (fausseté formelle), mais cela n'est pas simple. Car ces termes techniques, s'ils ne sont pas suffisamment examinés, ne produisent qu'une impression incompréhensible.

Arnauld, dans *Objectiones Quartæ*, relève la contradiction que produit l'introduction de *falsitas materialis* et juge que cela est en désaccord avec les principes cartésiennes. Car Descartes, ayant soutenu que la fausseté *ne* se trouve proprement *que* dans les jugements, dit néanmoins qu'il y a des idées qui peuvent, non pas formellement, mais matériellement, être fausses. En effet, il y a beaucoup d'interprètes qui refusent cette distinction. À mon avis, tant s'en faut que *falsitas materialis* n'est pas la notion inutile, au contraire elle est indispensable à la philosophie cartésienne.

Ce qui embarrasse les lecteurs de *Meditationes*, c'est le fait que Descartes emploie ces termes d'une façon compliquée. Donc il faut qu'ils soient examinés en respectant le contexte. Ce travail dissipera la malentendu d'Arnauld dans une certaine mesure.

Où se trouve en réalité la position cartésienne? Descartes utilise bien l'équivoque de l'idée en sorte qu'il se sauve du solipsisme. Si l'on prend le mot d'«idée» *materialiter* pour une opération de l'entendement, l'idée *même* ne peut pas *formaliter* être fausse, au contraire si l'on le prend *formaliter* (*objective*) pour la chose qui est représentée par cette opération, l'idée *obscure* peut *materialiter* être fausse. À part l'appréciation sur la théorie, *falsitas materialis* joue un rôle important dans la philosophie cartésienne. Car sans cette notion, Descartes ne pourrait pas se sauver du solipsisme.

(平成4年9月29日受理)

(平成4年12月28日発行)